

講演「仙台・宮城におけるホームレスの変遷」

2022年8月1日

NPO 法人仙台夜まわりグループ 青木康弘

仙台夜まわりグループの青木です。

私は、常日頃、仙台市内に約 88 名おられるホームレスの方々の支援活動、相談事業、さらにお部屋を確保した 100 名余りの元ホームレスの皆さんの生活支援をおこなっています。その出会いを通してさまざまなことを学ばせられておりまして、本日は、その一端を、みなさんと共有することができたらと願っております。

最初に、仙台夜まわりグループの沿革についてご紹介いたします。

私は、今から 24 年前 1998 年に仙台にやってまいりました。

約 20 年前の仙台は、今に比べて格段に寒かったような気がいたします。12 月から 3 月の間に何度も大雪が降り、その度に雪かきに苦勞をした覚えがあります。

そのような仙台市内に、当時少なくとも 300 人くらい路上生活を余儀なくされている方々がおられました。榴岡公園内にテントを張ったりブルーシートで小屋掛けして寝泊まりをしていた方々が 100 人くらい、西公園内とその周辺に 50 人くらい、さらに仙台駅やその周辺に 100 人、そしてイオン地下（当時はダイエー地下でしたが）に 10 数人、その他、勾当台公園ですとか、橋の下とか、公園の東屋などに、合わせて 300 人くらい、いらっしやいました。

そのような中、毎年冬期に、10 名以上の方々が路上で亡くなっていました。

遠い世界の話ではなく、私が住んでいる仙台、宮城、その足元で、誰にも見取られずに、毎年 10 人単位で路上で死んでいかれる。そして死因の多くは、凍死であったり、栄養失調による衰弱死、

いわゆる餓死であったりしました。

20年前当時の仙台市長さんが、マスコミのインタビューで、仙台市内にホームレスはいないから支援施策を講じるつもりはない、と答えておられたのですが、それでは今私たちが実際に出会っている300人を超える路上生活を余儀なくされている人たちは、いないことになっているのかと、いたく憤慨した覚えがあります。つまり、存在するのにも関わらず、存在しないとされる、これは、「ホームレス」という側面が如実に表している、私たち社会の実相だと思わされます。

ことホームレスに限らず、私たちの社会において、たくさんの問題を抱えて生活に苦しむ人たちがいるにも関わらず、まるでその人たちが存在しないかのように扱われていく、あるいは、実際根深い問題が「ある」にも関わらず、あたかも「ない」かのように扱われていくという私たちの社会、私自身の日常があるのではないかと、ということを支援活動を繰り返すたびに感じさせられているのですけれども、少なくとも私が住む仙台、宮城で、誰にもみとられずに路上で死んでいく、そういう悲しい出来事をなんとか起こらないようにしたいという思いで、2000年1月13日に、私を含めて3人で夜まわり、夜の巡回活動を行いました。

寒い時期でいたが、ホッカイロをもって、ひとりひとりに手渡して回りました。体の具体はどうですか？何か困っていることはありませんか？と声をかけました。それから毎週一回、木曜日の夜8時にスタートし、市内を巡り歩いて、300人の人たち一人一人に声をかけて回り、終了するのは夜中の3時くらい、都合7時間をかけて、路上生活者と出会い続けました。

当事者の方々は、最初は警戒して振り向いてもくれなかったです。それは当たり前前で、彼ら彼女らは、これまで様々な被害を

受けていたのです。例えば酔っ払いに絡まれたり、蹴られたり、殴られたり、石を投げられたり、ひどい時には小便をかけられたり、そういう酷い目にあっていますから、見知らぬ人に突然声をかけられたら警戒をするのは当たり前です。「ホームレスは怖い」という根拠のないイメージを持たれがちですが、怖がっているのはむしろ彼ら彼女らの方です。ですから危険を回避するため、身を守るため、なるべく複数で行動しようとし、まとまって野宿をしようとしています。

日中は、公共の施設、図書館ですとか、市役所や区役所のロビーなどで過ごして、深夜になったらそれぞれの寝床に戻って来て、束の間の休息を取ります。

先ほど申しました通り、夜まわりを最初に始めた頃、なかなか関係を作れなかったのですが、毎週会に行き声にかけているうちに、名前を名乗ってくれるようになり、身の上話しをしてくれるようになり、相談事や困り事を吐露してくれるようになって、そして、彼らの切なる要望に答えるような仕方で、週に一度の「夜まわり」から始まった活動が、広がり始めました。

通常の活動として、毎月第四土曜日のカレーの炊き出し。毎月第一土曜日のセミナー・食事会。この活動は、食事会とリンクさせてセミナーを開催し、働く人の権利の話ですとか、最低賃金、公的扶助の利用の仕方などの学習会を開催しています。

当事者が主賓となってゆっくり過ごしてもらおうというコンセプトの大人食堂（毎週木曜日）、シャワーを浴びたり洗濯をする機会を提供したり（毎週月曜日）、就労意欲を失わないようにとのコンセプトで、清掃アルバイト機会提供（毎月第二、第三、第四土曜日）、相談センター「HELP みやぎ」の運営、その他、居宅確保支援、生活見守り支援、女性のシェルター運営、リユース事業、お部屋に入った男性を対象とした料理教室開催、アルコールやギ

ヤンブル依存症の方々の回復プログラム実施、さらには、ネットカフェ長期滞在者や車上生活者の方々の調査や支援と、ほぼ毎日当事者と出会うような活動となって、現在に至っています。

特に私たちは、毎年冬の時期に、この東北の地で、寒さの中、なんとか生き延びてほしいということで、特に支援に力を入れていまして、年末年始に行政や公共機関が休みに入る正月休みの期間に、毎年支援物資の提供と巡回を行なっています。

昨年 2021 年 12 月 30 日から 2022 年 1 月 6 日も行いまして、8 日で延べ 200 人の方々が活動に来られ、そのうち疲弊している方の居所支援も行いました。

さて、活動を始めた当初、今から 20 年ほど前、仙台市内には 300 人を下らない路上生活者がいたと、先ほど申しました。その内の 70%から 80%くらいが東北 6 県の出身でした。若い頃、東京や大阪といった都会に出て働いて、働いて、働いて、でも年をとって、気がつくとも手元に何も残っておらずに、仕事も居場所もなく、そこで、少しでも生まれ故郷の近くに来たいと考え、東北でもなんとか食えそうな、なんとか仕事が見つかりそうな仙台に来て、そして、仙台に留まって自分の故郷である青森や秋田、山形や福島岩手などの故郷（ふるさと）に思いを巡らせる。

そのような彼ら彼女らに出会い、身の上話を聞くにつれ、なんて可哀想なのだと思わされまして、しかし、その可哀想を作り出している根本的な問題、構造的原因は何かということ深く考えさせられる機会ともなりました。

金の卵ともてはやし、出稼ぎの人たちの労働力を都合よく利用し、奪いつくし、吸い尽くして、歳を取ったら後は知らないよ、仕事がもうないから辞めてくれ、と簡単に切り捨てていく、そのような都会の論理と言いましょか、弱者切り捨ての

社会の構造において、歴史の中で東北と言う地は、あの福島原発事故もそうです。常に大都会の犠牲になってきた、今もそれは変わらないのかもしれませんが。東北に限らず、あの沖縄も然りです。日本の0.6%の面積しかない小さな地域に、日本全国の70パーセント以上の米軍基地が集中しているというような、構造的な問題、様々な問題を、作り出しているこの国や私たち社会の現実がある、その矛盾の上に私自身が生きている、それを、ホームレス一人一人と出会う中で、その感をますます強くさせられたのを今でも覚えていますし、今なおそのことを知らされ続けています。言葉を変えるならば、いわゆる「路上」というのは、その時代時代の社会の状況が集約される場所と言いましょうか、あらゆる社会の問題の坩堝、言葉を変えるならば、私たちの現状を映し出す鏡のような場所なのだろうと思います。

先ほど申しましたように、私たちが活動を始めた約20年前、2000年代初頭は、都会に働きに出て働いて働いて、年を重ねて、「もう年齢的に仕事は無理だ」と言われ解雇される。はたと気づくと、手元に何も残っておらず、社会保険や厚生年金もかけてもらっていないので年金も失業保険も貰えない。仕方がなく東北に戻って来るのだけれども、今さら生まれ故郷には戻れない、どんな顔をして実家の戻れるのか。そこで、仙台に行けば同じ東北だし、故郷に近いし、なんとかなるのではないかということで、仙台にやってくる。

そのような、東北出身の50才代後半から60代前半の男性の割合が、仙台の路上生活者は高かったように思います。

ところが、2008年にリーマンショックがおきまして、詳しくはご説明しませんが、アメリカニューヨークに本社があったリーマン・ブラザーズという当時最大手の投資会社が破綻して600兆円以上の負債、それが日本にも波及したのですが、このリーマンシ

ヨックの直後、仙台でも経済的問題を抱えた人たち、特に働き盛りの男性が、勤めていた会社が突然倒産しその結果路上に陥ったという方々増加しました。

私たちが支援した方の中で、大型トラックの運転手を長年してきた40歳代の男性がいらっしゃいました。月収70万円を下らない、本当に頑張っていて働いて来たのに、突然運送会社が立ち行かなくなって、マンションのローンが払えなくなって、結果家庭が崩壊し、全てを失って路上生活、強いられてしまったということでした。これまで真面目に働いて家族を養っていたのに、どうしてこんなことになってしまったのか、どうしてよいのかわからないとご本人が頭を抱えていたのを覚えています。

そして、2011年3月の東日本大震です。震災直後、護岸工事や半壊したり全壊したりした家屋の解体、福島原発事故後の除染など、復興関連の仕事を求めて全国各地から、働き盛りの人たちが東北に集中しました。しかし、復興関連の仕事が一段落して、仕事と寮の部屋を失って、仙台で路上生活を余儀なくされたという方々が爆発的に増えました。

ホームレスの平均年齢も、東日本大震災前の56才から47才と、10才近く若くなりました。

つまり、生活に困窮する、路上に陥る、というのは、単に自己責任や自己都合で片付けられられないのでありまして、むしろ、その時代の社会を取り巻く状況や、国の政策、特に経済施策の問題等、外的な要因によって生活困窮し、路上生活を余儀なくされてしまう、まさに、貧困が生み出されるという構造的現実があると思っています。

私たち誰しもが、人生の中で経験するであろう生活の問題、人生の危機、例えば、病気、怪我、失業、離婚、親の介護等で家のロ

ーン、車のローンを払えない、生活ができない、という危機に際し、私たちは、なんとか頑張っってそれを切り抜けようとしたり、それでもダメな時には周囲の支援によって乗り切ろうとする、なんとか乗り切ることができる、その連続が実は私たちの人生なのかもしれません。

でもそれら問題が、一度に複数訪れる。人生の危機が重なる、そういう状況に陥ってしまって、生活そのものが立ち行かなくなってしまう。孤立無縁になって、踏ん張りきれず、どうしようもなくなって路上に陥ることが多々あります。そのような意味で、ホームレスというのは、一部人たちの特別な課題でなく、誰しもが、そうなる危険に陥る可能性があるということです。

そのような時に、往々にして「自助」、「共助」だけが強調されることがよくあります。自己責任なのだから自分でなんとかすべき（自助）ですとか、家族で、親戚で、仲間でお互いに助け合えばよい（共助）とかですね。しかし、自助、共助だけでは解決できないことがありますし、社会の状況がそのような問題を引き起こしていとするならば、「公助」が必要になって来ます。

例えば今、私たちは、コロナ禍にありますけれども、一番必要なことは、おわかりのとおり、「自助」、「共助」、のみならず「公助」、すなわち、国や行政による支援施策であり、あらゆる意味でのセイフティーネットの構築、ネットの網目をきめ細やかにして、どのような状況に陥っても、何度でもやり直しができる社会の仕組みをさらに豊かにしていくこと大変重要なのだらうと思います。そのことが一部の人たちだけの願いでなく、私たちみんなの願いになっていく、それによって、私たち誰しもが安心して暮らすことのできる世界につながっていくのだと思います。

ここで、東日本大震災にもう一度話を戻したいと思います。

2011年3月11日当時、私たちNPO法人の事務所は、仙台市若林

区文化町というところにありました。地震の際、私たちの事務所建物も大変な被害を受けまして、また、スタッフのご家族が津波の被害で亡くなるという悲しい出来事もありました。

そのような中、私たち NPO の事務所には、炊き出しのための食料や物資の備蓄がありまして、また、震災の影響で都市ガスは止まっていたのですけれども私たち事務所のガスはプロパンガスでした。

そこでスタッフ皆で話し合い、これは、被災者の方々への支援活動をしようということになりまして、震災直後 3 月 14 日月曜日から、ライフラインが復旧する二週間後まで毎日、被災者支援の炊き出しを続けました。

被災者支援の炊き出しにこられたある女性は、温かい物を何日かぶりに食べたと涙ぐんでいました。そのような中、炊き出しに来た人たちの中から、うちにこのような食材があるから明日の炊き出しに使ってくださいと、缶詰だとか食材、紙おむつ、粉ミルクなどを次々に持ってきてくれるようになりました。

被災者支援の炊き出しは、当初備蓄していた食材がなるであろう一週間くらいで終わろうと考えていたのですが、炊き出しに食べに来た被災者が、これを使ってください、これがありますって物資やら食材を持って来てくれる。そうになると、やめるにやめられなくなって、当初の予定の一週間で、10 日となり、最終的には、二週間続けることになりました。

被災者支援の炊き出しは、ホームレスたちも力になってくれました。食事作りの準備ですとか、車の誘導、並ぶ人たちの列の整理等を率先的にしてくれました。

屋根のある人もない人も、困ったときはみんなで助け合い、ご飯を食べて元気を出そうという真実を、その出来事を通して体験で

きたような気がいたします。

被災者向けの炊き出し、路上生活者支援活動を平行して行い、仙台市内で徐々にライフラインが復旧する中、今度は岩手県、宮城県の沿岸地区、特に孤立している集落への物資搬送及び提供を行いました。小さな集落は支援物資が届かない、とにかく何もない、なんでもいいから欲しいという人たちのところに物資を持って行って、そこで、「いや俺たちだけじゃない。ここだけじゃなくあの集落も大変なことになっている」と聞くと、また仙台に物資を取りに戻って、提供し続けました。さらに、避難所での炊き出し、仮設住宅の入居者への支援を続けました。

震災関連で申しますと、あの福島第一原発事故による除染の仕事をしていた方々は、仕事による被曝量が規定を超えた場合、除染仕事ができなくなりますから、職場と住まい(寮)を同時に失い、仕事を求めて多くの方々が仙台に流入して来ました。特に、2015年、2016年頃です。

除染に関して言うと、私たちが出会った生活困窮者の人たちは、二次下請け、三次下請け、四次下請け、中には5次6次下請けで働いていることが多かったですので、職場管理とか労務管理が非常にずさんな中で働いておられて、例えば、仕事における自分の被曝量がわからない方が多かったです。放射線管理手帳を会社が管理していて自分の手元にはなく、自分がどれくらい放射線を浴びたかわからないという人たちからの相談が殺到しまして、ある医療機関の協力を得て、50人以上の人たちのホールボディカウンター検査や甲状腺総合健診を無償で受診してもらいました。

そんな中、東日本大震災の直接的、間接的な要因で、生活困窮に陥ってしまった方々からの相談が殺到いたしまして、それを一括して受けるために、2013年から、生活困窮者相談センター「HELP

みやぎ」を運営しています。電話予約受付は、朝 8 時から夜 9 時半まで。年中無休で運営しており、2013 年から現在に至るまで約 3 万件を超える相談に対応して来ました。

さて、厚生労働省では 2003 年から、毎年 1 月に全国でホームレス概数調査を実施しています。2002 年に公布されたホームレス自立支援法に基づいて、全国の都道府縣市町村にどのくらいの路上生活者がいるのか毎年調査する、のですけれども、今年も 1 月に実施しました。

その結果によると、実施初年度 2003 年は、全国で 25,296 人のホームレスが確認されました。その後、官民の様々な施策によって、年々人数が減少し、今年 1 月の調査では全国で 3,448 人でした。2003 年の約 2 万 5 千人から 2022 年の 25,296 人ですから、約 1/7 から 1/8 くらいに右肩下がりに減っています。特に大都市と言われる東京、大阪、名古屋、神奈川の減少が顕著です。

ところが、仙台市に限っていうと、2003 年に 203 人、2011 年の東日本大震災後は 100 人前後で推移し、一昨年 2020 年は 70 人、昨年 2021 年は 76 人、そして今年 2022 年 88 人と、ここ数年逆に増加しています。

つまり、仙台では、2003 年の 203 人から今年の 88 人まで、1/2 あるいは 1/3 に減っているけれども、減り方が鈍いですし、東日本だし震災以降は、減ったり増えたりを繰り返して、この数年はむしろ増加傾向にある。

仙台市内でも、官・民それぞれが支援施策を実施しておりまして、仙台市内では、毎年大体 50 人くらいの方々が路上生活を脱却している、にも関わらず、総体として増加しているということは、自立を果たした 50 人以上の方々が、新たに路上に陥っている現象が起きているということなのです。

しかも、概数調査の対象には、ネットカフェ長期滞在、車上生活

の方々にはカウントされていない。しかし、実際は、ギリギリのところまで明日の仕事が見つからないという人たちが、そういう若者たちが増加していて、概数調査で仙台市内に 88 人のホームレスがいると申しましたが、そこに含まれない、境界線上で苦しんでいる人たちを入れると少なくともその 1.5 倍、130 名～150 名の人たちが、今この時も、厳しい現実を強いられているということになります。

ちなみに、仙台市以外の宮城県の市町村におけるホームレス数は、この数年一人ということですが、実際には、これはあり得ない数だと思います。

そして、2020 年からのコロナ禍です。今から 2 年前、2020 年の春に、新型コロナウイルス感染症が大流行してから、特に、2020 年の 3 月 4 月ごろに、若者たちからの相談が殺到しました。それは、現在も続いています。

とにかく飲食関係で働いていた若者たちからの SOS が多かったです。

仙台地元の老舗酒屋の二代目で大学を卒業して実家の家業を都合としていたのだけれど、コロナ禍で飲食店からの酒の注文が途絶えて家業が傾き、資金繰りが尽きて店じまいをすることになって借金を背負い路上生活を余儀なくした 30 才代の若者がいました。「やっと跡継ぎができて安泰だ」と喜んでいた父親も途方に暮れていたということでした。

あるいは、東京赤坂で、高級割烹料理店の板長だった人が、仕事が全くなくなって部下のために自ら職を辞し伝手を頼って仙台に来たもののどうしようも無くなったという方もいらっしゃいました。コロナ禍の影響で生活困窮に陥る多くが、突然の失職で途方に暮れるという方々ばかりでした。

他方、私は思いを巡らせていることがあるのですけれども、この数年のコロナ禍において、私たちの国、社会では、緊急事態宣言が繰り返し発令され、自粛、自粛、ステイホームが叫ばれました。

勿論、今申し上げましたように、コロナ禍の直接的影響で仕事を失ったり、生活が破綻してしまった方々は多くいらっしゃったのです。

でもその一方、コロナ禍に関わらず、すでに生活が破綻していた人たち、中には、今いる場所から逃げ出した方が良いと思われる人たち、お部屋や家を出た方が良いと思われる人たちが、「ステイホーム」せざるを得ない状況を強いられることがあったのだと思います。

ある女性は、パートナーから酷いDVを受け続けていたにも関わらず、「ステイホーム」、その場から、家から出ることが、逃げるができなかった。

日給月給の工事現場で働いている男性は、コロナ禍で仕事が減って、週に2、3日しか働けなくなった。しかし、寮住まいをしていて部屋代と食費は仕事があるなしに関わらず、毎日加算される。時に月に数日しか仕事がない。そうすると、収入がほとんどないのだけれど、家賃と食費は毎日かかるし、タバコを吸いたいから会社から前借りをする。結局、部屋代、食費、前借りで会社への借金が膨らみ続けてしまう。

そんな不当で過酷な状況からは逃げていい、逃げてしまった方がいいのだけれど、しかし、コロナ禍で「ステイホーム、そこに留まりなさい」と言われ、たとえ酷い目にあっていても、た

とえそこにいるだけで借金が膨らんでいく環境にあっても、そこにいるしかない、しがみつくしかない、という状況があったように思います。

現在、罹患者が増加していますけれども、いつの日か、収束に向かう時、私が危惧するのは、もはやここに止まりたくない、ここにいられないという人たち、暴力を受けていたり劣悪な環境にいる人たちの大勢が、そこから飛び出し、逃げ出して、路上に溢れかえるようになるのではないか。それが杞憂に終わればよいのですが、私は、それを大変危惧しています。

このコロナ禍において、私たち支援者側にとっても、これまで全く経験したことのない、予測のつかない出来事が起こり続けていると言わざるを得ません。

最後に、今後の課題について少しお話しさせていただきます。様々な場面、様々なところでよく言われることですが、「ホームレス」と「ハウスレス」は違うということを、深く考えさせられています。

ある女性を紹介します。彼女は60才代で、おそらく精神疾患を患っていらっしゃるが、しかし、残念ながら病識がありません。自分が病気であるという認識がないのです。彼女は年金を受給していてアパートの部屋もある。家賃も払ってしまして、しかし、彼女は部屋に帰らない、というか、帰れないそうなのです。

彼女によると、某宗教団体からの電磁波攻撃が続いているということなのですが、部屋を調べてもそのような形跡はありません。彼女はそれで、毎日市内の公園や駅のベンチで過ごしていらっしゃる。

これまでホームレスというと、「家がない」「部屋がない」人たちと括られて来ました。

そのような方々への支援として、まず居所を確保して、そこからその先をゆっくりと考えていくこと、すなわち「ハウジングファースト」の重要性を感じるのですが、しかし、一方で、「部屋がある」人たちが置かれている課題を、路上での出会いを通して思わされます。

先ほど「ホームレス」と「ハウスレス」は違うと申し上げましたけれども、「ホームレス」はハードとしての部屋や家がないということにとどまりません。

ハードとしての部屋や家がないのは「ハウスレス」です。たとえハードとしての家や部屋があったとしても、さまざまな局面で関係性や自分の根拠を失って孤立してしまう、それが実は、「ホームレス」という言葉が持つ本来の意味、課題なのだろうと思うのです。

逆に言えば、たとえ家やお部屋があつて、家族と一緒に暮らしていたとしても、相互の関係性を失い、お互いに関心を持たず、一つ屋根の下に暮らしていてもそれぞれが孤立している、とするならば、それは「ホームレス」と言わざるを得ない。

としたら、「ホームレス」という言葉は、さまざまに問いかけを持って私たちを問い直しているのだろうと思います。

現在、私たちが生きているこの社会、コロナ禍も相まって、皆疲れています。人のことどころではない、自分のことで精一杯という思いに支配され、関係性が奪われ、一人一人が分断され、他人に興味を示さず、孤立していくという傾向にあります。

生活苦や心身の疲れ、将来の不安で、心がキリキリしていく、まるで自分以外の皆が敵であるかのように思い込んでしまう、s
そのような閉塞状態の中、そのような時代だからこそですね、人が本当に人として、自分を謳歌して生きることができるように、私が私として生きるように、そして、あの人もこの人も、一人一人かけがえのない人間であることを取り戻していけるような関係、世界を作っていくこと、それは、言葉変えるなら、私自身が人であることを取り戻し、他者を大切な人として確認していくことであろうと思います。
それを大切な根拠にして、私たち仙台夜まわりグループは、これからも支援活動や政策提言をして参りたいと願っております。

ぜひ、皆さんの周りに生きている人、社会の人たち、世界の人たちに興味を持ってもらって、今社会で何が起きているのだろう、世界はどう動いているのだろう、ということに関心を持っていただいて、そして、人が人として生きることに参加していただきたいのです。

それは、ホームレス支援という一つのテーマだけということではありません。

それぞれの皆さんが置かれている状況、それぞれが出会った課題やテーマにおいて、ぜひ、人間が人間として生きる、そのことに参加するお一人おひとりになっていただきたいと切に願うのであります。

ご清聴、ありがとうございました。

(2022. 8. 1 尚敬学院大学)